

2021. 6. 6 (日) マタイ25:14~30

<説教>

主イエスは、ご自分が再びこの地上に来られるその日、その時をあなたがたは知らないのですから目を覚ましていなさいとご自分の弟子たちに繰り返し言われます。

主人であるご自分が地上に帰って来たときに「忠実で賢いしもべ」であることを見てもらえるしもべは幸いだと言われました(24:46)

イエスはご自分が再び来られるときに〈天の御国〉の王、支配者としてご自分のしもべたちにどのような審判をお下しになるか、〈旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで財産を預ける人〉のたとえで弟子たちにお示しになっておられます。

〈彼はそれぞれその能力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを渡して旅に出かけました(25:15a)〉。

最も少ない〈一タラント〉と言えども 6,000 日分の労賃に当たりますから(欄外注)しもべが〈それぞれその能力に応じて…渡〉され預かった主人の財産はそれぞれにとって途方もなく大きいもの、重いもの、有り難いものだったはずです。

主人が〈自分のしもべたちを呼んで財産を預け〉、〈それぞれその能力に応じて…渡し〉た意思・目的は第1に〈主人の喜び〉(21,23)、利益のためでした。

同じような内容の「たとえ」(ルカ 19:11-27)の中では〈彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をなささい』と言った。〉(13)とありますから、ここでも自分のしもべが預かった〈タラント〉を元手に商売をして自分が帰って来たときに自分の〈財産〉が増えているようにするためだったと思われまます。

主人の意思・目的の第2は〈自分のしもべ〉のためでもありました。

しもべが、自分の働きが主人から正当に評価され、報われて〈主人の喜びをともに喜ぶ〉ためでした(21,23)。

このように、主人は自分のしもべに「なすべき務め」「義務」「責任」を与えると同時にその任務を果たすのに必要なもの(このたとえ場合は〈タラント〉)をも与えました。

任務も、そのために必要な力も、どちらも主人が自分のしもべに与えたのです。

そこで問題は、それぞれのしもべがそれぞれ自分に「主人から預けられ与えられた」「主人の財産」をどれだけ大きなもの、重いもの、有り難く感謝すべきものとして受け取ったか、ということです。

また、主人から与えられ、期待もされた任務、責任をどれだけ大きく、重く、同時にやはり有り難く感謝すべきものとして受け取ったか、ということです。

〈主人の喜び〉を第1とし、その主人と〈ともに喜ぶ〉ことを自分の喜びとしていたか、ということです。

〈五タラント預かった者〉〈二タラント預かった者〉は自分の主人の意思・目的を正しく重く真剣にまた感謝と喜びをもって受け取り、主人の財産をも同じように受け取り預かり、〈すぐに…出て行って、それで商売をし〉、それぞれ更に五タラント、二タラントをもうけました(16,17)。

主人は〈かなりの時〉留守にしていたましたが、主人が見ていなくても主人の意思に忠実に働き、〈主人が帰って来て彼らと清算〉(19)するのを心待ちにしていたことでしょう。

二人とも同じように(きっと喜んで)主人に報告しました。

そして主人も同じように喜んでそれぞれに言いました。

「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」(21,23)

〈忠実な〉と訳される言葉は「信用する」「信頼する」という意味の言葉であり、「信じる」「信仰」と訳される言葉とほとんど同じ言葉です。

この二人のしもべの〈忠実〉さは、何よりも自分たちの主人をあらゆる面で「信用」「信頼」していた「信じて」いたことにあったと言えるでしょう。

そして主人から五タラントもまた二タラントも預けていただいたことに、主人もまた自分をそんなに信用してくれているのかと驚き、感謝し、重く、真剣に受け取ったのだと思います。

だからなかなか主人が帰って来ない間も主人の意思を常に思い起こして忍耐強く〈忠実〉に働いたのでしょう。

さて〈一方、一タラント預かった者は出て行って地面に穴を掘り、主人の金を隠した〉(18)のでした。

そして主人が帰って来たときに（その間そのしもべはいったい何を考え、何をしていたのでしょうか）、報告をしました(24,25)。

この〈一タラント預かっていた者〉の言葉は五タラントの者、二タラントの者の言葉とは全く違うもの、何の感謝も喜びもないものであり、主人への不信に満ちた、不平不満、恨み節でした。

彼には主人が自分を信用してくれて大事な〈一タラント〉を預けてくれたという驚きも主人への感謝もなく、おそらくは五タラントや二タラント預けられたしもべと自分を比べて、「なんだ、俺にはたったの一タラントか」とか「これじゃあ何もできない」、「かえって迷惑だ」「余計なことをしてくれたものだ」などとさえ考えたのではないのでしょうか。

〈地面に穴を掘り、主人の金を隠した〉〈地の中に隠〉したということは、つまり「葬り去った」「殺した」と言っていると思います。

そやって彼には主人への信頼もなく、一タラントを預かったという驚きも感謝も喜びもなく、主人の意思に逆らい、主人が彼に与えた任務を拒否したのです。

彼は主人の意思を気にもかけない、主人の喜びを喜びとしない、主人に何の利益も喜びももたらさない〈役に立たないしもべ〉〈外の暗闇に追い出〉されて当然という主人の審判を受けました(30)。

さて私たちも、自分の持っているものはみな、目に見えるもの見えないものすべてが主からそれを主の意思（みこころ）にかなって用い、主の喜びのために用いるように主から預けられた主の大きな重い賜物として、驚きと感謝と喜びをもって受ける必要があります。

「自分には何も与えられていない」「これっぽちしか与えられていない」「だから主のために何もできない、しない」と不平不満を言うのではなく、一方反対に主からの賜物であることを忘れて「自分にはこんなに力がある、能力がある」と高慢になるのでもなく。

一人一人に主がみこころに従って与えてくださる主の賜物を主に信頼し、主に従って正しく用いる〈良い忠実なしもべ〉として歩みたいと願います。

やがて必ず来られる主に信頼し、主の喜びを第1に願い求める〈良い忠実なしもべ〉が、この地上で主から預けられた賜物を正しく、大胆に用いることができるのです。